

----- 国語科 -----

文学作品における読みの課題を協同的に読み深める学習活動の展開

実践者 細川 美保, 大上 航太, 丸山佑樹
愛媛大学研究パートナー 三浦 和尚

第1章 はじめに

生徒に持続可能な社会を支える資質・能力を育成するためには、自分の経験・価値観・感性などを基に言葉を用いて課題を解決する力（自立の力）と、多様な価値観を認め、お互いの個性を尊重したり他者と協調しながら進んで行動したりする力（共生の力）を育てる必要がある。

文学作品を読むことは、自分、それを取り巻く人、ものとのよりよい関係を築くための基盤になるとともに、読みを深める中で言葉を吟味し、読み手自身の経験や価値観と比べ、読み手それぞれの多様な考えを表出していくことにつながる。さらに、ものごとを批判的に考えたり多面的に捉えたりする力を育てるためにも必要不可欠なものである。

そこで、主張・事実・理由づけについて筋道を立てて考え表現する力を育て発揮させながら、文学作品における読みの課題を協同的に追究し読み深める学習活動を展開することにより、上に挙げた自立と共生の力を育てることにつながると考え、本研究主題を設定した。

第2章 研究の実際

研究（その1）

対話的な学びを通して文章に表れたものの見方や 考え方について読み深める学習指導の工夫

（実践者）細川 美保

1 研究テーマ設定の理由

現在、様々な場でコミュニケーション能力の育成が求められている。国語科では「伝えたいことをうまく伝えること」「伝えたい事柄、自分の考えについて、根拠を明確にして具体的に書いたり、話したりすること」「課題解決のために必要な情報を集めたり、読むべき箇所を自ら判断したりすること」に課題があると言われている。持続可能な社会を支える資質・能力として、他者に自分の考えを伝える力、多くの情報から必要な情報を取り出し、筋道を立てて考え、表現する力は必須である。

昨年度は、言葉そのものを理解すること、言葉のつながりから文章全体の内容を的確に理解すること、それについて、自らがどのような考えを持っているかを筋道を立てて表現することに取り組んできた。同じ文章を基にしている、その人の考えや体験、価値観によって、理由づけの内容に違いが表れる。その違いを知ることが、人を知ることにもつながるということを学んだ。

昨年度の取組を踏まえ、今年度は文章の中の多くの言葉の中から、視写や音読を通して「読み深めるポイントとなる言葉」を生徒自身が考え、そこから学習課題を設定することから学習をスタートする。さらに、課題解決に向けて話し合い、聴き合い、共有し合いながら自己内対話の時間を設け、読み深めることを目指していきたい。登場人物の心情や、他者の発言の意図を読み取り、その意図を踏まえた上で自分の意見を述べることで読みを深め、読み味わうところまでにつなげていきたい。言葉をよりどころにして考えを深め、仲間とつながったり課題を解決したりすることが持続可能な社会を支える資質・能力につながるのではないかと考え、本研究テーマを設

定した。

2 研究の内容及び方法

(1) 生徒の実態把握

(2) 協同の学び合いの場の充実

ホワイトボード等を活用して様々な意見を目に見える形に表し、自分の考えが広がったり、同じ考えを聞いて自分の根拠が一層明確になり自信が持てるようになったりするなど、生徒の考えの変化が期待できるような授業展開とする。また、うまく言葉にならない生徒に対しては、グループや学級全体でその生徒の思いを受け止めながら一緒に言葉を創っていくことを大事にする。さらに、自分や他者の思考を後で振り返ることができるように、ワークシートを工夫する。

(3) 音読と視写を取り入れた授業の工夫

短歌や古典の授業において繰り返して音読することは、文章や定型詩のリズムを体感し特徴を理解すると共に、日本の言葉そのものの響きの美しさを感じ取る時間となる。また視写をすることは、落ち着いた時間の中で、個人で言葉や文章、作品に込められた思いなどと向き合う時間となる。音読や視写は、音と文字によって日本語に触れ、見過ごしていた言葉を改めて見つめたり、その言葉の意味を考えたりするきっかけとなり、文章を理解する手立ての一つとなるのではないかと考える。その中で、生徒に主体的に課題を発見させたいと考えている。

3 研究の実際

(1) 生徒の実態

本実践対象学級の生徒(80名)は、意見を出し合い、学級全体で話し合う中で、共感したり反論したりしながら力を合わせて読みを深め合うことができる。昨年度は詩や物語において、生徒の疑問を踏まえて教員が設定した課題について話し合う中で読みを深めた。一つの課題について話し合いは数時間に及ぶこともあったが、その時間を楽しみながら主体的に学習を進めることができた。それを踏まえ今年度は「生徒自らが課題を設定する」ことに取り組んできた。短歌の学習では三十一音の中で作者の思いが詰まっている言葉を自分たちが話し合い、そこから読みを深めていった。また『枕草子』の学習では、随筆であることから、作品には作者の人間性が出るのではないかと、ということを考え、「清少納言はどのような人物なのだろうか」という課題のもと「第一段」の現代語訳を丁寧に読み、言葉そのものや言葉のつながりから考えたことについて、友だちと協力しながら読み深め、清少納言の人物像について自分の考えを持つことができた。話し合いの様子を見ると、昨年度は友達の意見に流されたり、自分の意見を他に伝えられなかったりしていた生徒も、少しずつ自分の意見が授業内容や友達の考えに反映していくことを楽しめるようになってきた。しかし、数名ではあるが根拠がしっかりと書けないまま意見を述べる生徒もいるため、うまく言葉にならない生徒に対しては、グループや学級全体でその生徒の思いを受け止めながら一緒に言葉を創っていくことを大事にしていく必要があると分かった。

(2) 論理的に思考し表現する力を高めるための工夫

論理的に思考し表現する力を高めるための工夫として、次の三つのことに留意して指導していきたい。

一つ目は、言葉を大切にすることである。学習者の思考の基本は言葉である。それをどう理由づけするかによって読みは違ってくる。言葉の一つ一つを大切にしていけることを基本において学習を進めたい。そのために、音読や視写を授業に取り入れ、言葉そのものと向き合う時間を設けた。

二つ目は、協同の学びを発揮する場を設定することである。文学作品を読み深める際に、問答ゲームの形式を用い、自分自身の考えを明確にしたり深めたりしていく場を設けた。さらに全体

の学習の中でも、友だちの発言に対し疑問に思ったり自分の意見とは異なっていると思ったりした場合に積極的に自分の考えを伝えたり、友だちの意見に補足して賛同したりするなど、互いの立場や考えを尊重しながら全体で論理的に読み深めていく場を設定した。

三つ目は、相互評価を行う場を設定することである。自分の考えが深まるきっかけとなった発言をした友だちを授業の最後に発表し、賞賛する場を設けた。自分のものの見方や考え方を広げさせるために、友だちの発言から、文学作品に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の見方や考え方と比較したり検討したりする活動を行った。

(3) 授業の実際

ア 指導の実際

(7) 単元名

戦乱の中での人間の生き方を考えよう

(4) 単元目標

場面の状況や登場人物の行動に着目し、話し合い、考えを共有し合いながら登場人物や作者の思いなどを想像することで、古典に表れたものの見方や考え方に触れたり、視野を広げたりしながら、読み深めることができる。

[本質的な問い]

古典作品(物語)を読み深めるにはどのようにすればよいのか。

[永続的な理解]

歴史的な背景や生活状況、自分の経験を踏まえながら表現に基づいて登場人物の言動について考えることが、先人の思いや、物語の根底に流れる古典作品のテーマに迫ることにつながり、古典を主体的に読み深めることになる。

(ウ) 評価目標と評価方法

評価目標	評価方法
①『平家物語』において主体的に登場人物の思いを理解しようとしたり、登場人物の魅力を表現しようとしたりする。 (関心・意欲・態度)	◎パフォーマンス課題 昨年『平家物語』の「扇的」を学習した3年生ですが、那須与一以外の武士の生き方についても伝えたいと大上先生から相談がありました。そこで、2年生が「敦盛の最期」の場面における「敦盛と直実の生き方」について解説書を書き、3年生に読んでもらおうと思います。「敦盛の最期」の場面を読んでいない3年生が、敦盛と直実の生き方について理解できるように解説書を書いてください。 (①②③) ○観察 (①) ○ワークシートやアドバイスの記述分析 (①②③)
②古典に表れているものの見方や考え方を歴史的知識や自分の経験に基づいて捉え、自分のものの見方や考え方を広げている。 (読むこと)	
③古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像している。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)	

(エ) ルーブリック

①敦盛と直実の生き方について、それぞれ2つ以上の本文の根拠を元に解説できており、それぞれの生き方の解説が納得できるものである。	
②「敦盛の最期」を読んでいない3年生にも内容が分かるように書いている。	
A	①と②が踏まえられており、読者は武士としての生き方について考えることができる。
B	①と②が踏まえられている。(一部納得できない部分があるのは可。)
C	①もしくは②、または①②共に、適切に書かれていない。

(オ) 指導計画(全7時間)

次	学習内容	◇評価規準(観点)	時間
1	学習の見通しを持つ。	◇古典に表れているものの見方や考え方を歴史的知識や自分	

	○学習内容と単元を通してどのような学習をするか確認する。 ○『平家物語』の冒頭部分を読み、意味の切れ目に注意して繰り返し音読する。 ○文体の特徴を理解する。	の経験に基づいて捉え、自分のものの見方や考え方を広げている。 (関心・意欲・態度)(読むこと) ◇作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しんでいる。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)	1
2	『平家物語』を読み深めよう。 ○冒頭部分に表れているものの考え方について読み深める。 ○「敦盛の最期」の場면을視写、音読しながら、内容を理解し、疑問を出し合う。 ○自分なら敦盛の首を取るかどうかを話し合う。	◇「冒頭部分に表れている、平家物語のテーマとは何か」について、古文の言葉を大切にして読んでいる。(読むこと) ◇敦盛や直実の生き方を通して、武士としての生き方や歴史的状況について考えている。(読むこと) ◇話合いを通して自分の考えをまとめている。(読むこと)	3 本時 その3
3	解説文を書こう。 ○解説文の下書きを書く。 ○友だちの解説文についてアドバイスをする。 ○友だちのアドバイスを参考にして解説文を清書する。	◇2次までの学習を基に解説文を書いている。(読むこと) ◇「敦盛の最期」の内容と主張が論理的に表現されているかどうか、友だちとアドバイスをし合っている。(読むこと)	2
4	友だちの解説文を読み、批評し合おう。 ○お互いが書いた解説文を相互評価する。	◇友だちが書いた解説文を読み、古典に表れているものの見方や考え方を捉え、自分のものの見方や考え方を広げている。(読むこと)	1

(カ)第4時の指導(4/7時間)

○主題 敦盛と直実の生き方について考えよう

○ねらい

- ・文章の言葉を手がかりにしながら敦盛と直実の生き方について読み深めることができる。
- ・話合いを通して自分の考えをまとめることができる。

○展開

学習活動(形態)	時間	○教師の働きかけ・生徒の反応	○指導の工夫 ◇評価(方法)
1 本時の学習課題を確認する。(一斉)	2	○敦盛と直実の生き方について考えよう。	○課題を解決するために古典の内容を丁寧に捉えることを生徒に伝えた。
2 学習課題を提示する。	3	直実は敦盛の首を取ったが、自分が直実なら敦盛の首を取るか。	○視写と音読を通して前時で考えた「読み深めるポイントとなる言葉」を発表させ、それを基に教師から課題を提示した。
3 本文を音読する。	5	○本文を音読しよう。	○課題について考えさせるため、言葉の意味を考えながら各自で音読させた。
4 学習課題の解決に取り組む。 (個人)	35 (6)	○自分の考えを書こう。	○思考の整理をさせるために、自分の考えと根拠をワークシートに書かせた。 また、多様な側面から考えられるように、敦盛と直実の欄を別にした。

	(ペア)	(5)	○問答ゲームを行おう。		○考えとその根拠を確かなものにさせるために、問答ゲームで友だちの質問に答えさせた。
	(個人)	(4)	○自分の考えを見直そう。		○問答ゲームを通して、自分の考えを支える根拠が不足していたり、新たな発見があったりする生徒にはワークシートに加筆させた。
	(全体)	(20)	○自分の考えを、本文の言葉を根拠に発表しよう。 ・敦盛の武士としてのプライドをもった生き方を理解していない他の源氏方に首を取られるくらいなら敦盛の生き方を尊重して自分が首をとる。 ・いくら敵で、自ら「早く首を取れ」と言われても、我が子と同年代の敦盛の首を取ることはできない。		○学級全体で友だちの意見を補足したり発展させたりする話合いにするために、根拠が不明確な生徒にも積極的に発言を促した。 ◇言葉を手がかりにしながら「敦盛と直実の生き方」について読み深めている。(発表・ワークシート) ◇話合いを通して自分の考えをまとめている。(発表・ワークシート)
5 本時の学びを振り返る。(一斉)		5	○意外な発言、納得した発言、自分の読みを変えた発言、発見があった発言等について発表しよう。 ・○○君の△△という発言は、自分とは視点が違っていて、新たな発見がありました。		○話合いが、読みを深めることにつながることに気付かせた。 ○次の話合いへの意欲付けと学びの確認のために、お互いの発言について評価させた。

イ 生徒の学びの実際

生徒 75 名が「読み深めるポイントなる言葉」として挙げた言葉(上位 3 つ)

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| ・「とくとく首を取れ。」(30 名) | ・「泣く泣く首をぞかいてんげる。」(19 人) |
| ・「名のらずとも首を取って人に問へ。」(9 名) | |

以上のことから、単元に入る前から教員が考えていた課題「自分なら敦盛の首を取るか」につなげることができた。

本時ではまず、課題に対して自分の考えを書く時間を 6 分確保した。時間内に本文を根拠に主張を書いたのは約 9 割の生徒。その中の多くの生徒が敦盛と直実両側を合わせて 3～4 の根拠を挙げていた。問答ゲームを行った後、ほとんどの生徒が加筆し、全体での話合いとなった。

生徒 75 名のうち「敦盛の首を取る」が 55 名「首を取らない」が 20 名であった。

「首を取る」と主張した生徒の意見の特徴(ワークシートの記述より)

- 直実と敦盛の両人の言動や思いから「仕方なく首を取る」という判断をしている。また、武士として戦乱の世を生きているということを踏まえている。(以下生徒の意見を抜粋)
- ・どうせ殺されるなら、敦盛を思っている自分(直実)の手で殺してあげたい。
 - ・敦盛は幼い頃から武士としての教育を受けており、大将としての覚悟もできているから、それを尊重するのが武士だと思う。逃がす方が敦盛のプライドを傷つけてしまうことになる。
 - ・直実は、人の死を嫌うのであれば、敦盛を逃がして自分が満足するよりも、早く大将を殺して、少しでも早く相手を降伏させ、戦を終わらせたいと考えたと思う。

「首を取らない」と主張した生徒の意見の特徴(ワークシートの記述より)

- 直実側の言動、思いを中心に捉えており、敦盛側の捉えが薄い。場面の状況に関する根拠を挙げている生

徒が少ない。(以下生徒の意見を抜粋)

- ・人を殺すのはつらい。
- ・出家をしたいという思いを以前から抱いていた＝殺生を嫌っていたはずだ。
- ・自分の子どもと重なってしまい、殺すなんてできない。
- ・殺すのをつらく思っているの、自分ではなく他の源氏の手で切らせた方がよい。

「敦盛自身も自分を思ってくれている直実に殺されたいと思っているから首を取る。」と言った生徒に対して「敦盛にとって殺されるという事実は変わらないから、『首を取られるなら直実に。』という思いはないのではないか。」という反論が出てきた。そこで、「敦盛は首を取られるなら直実に、と思っていたか。」という問いをすると「敦盛は海側から引き戻したのだから、陸側を向いている。それならば五十騎の源氏軍は見えていたはず。そこで直実が自分を思って逃がせばそれを味方が見てしまい直実が罪に問われてしまう。敦盛は自分を気遣ってくれた直実になれば、という思いがあるのではないか。」「直実が『直実が手につけてもらって、後の御孝養をこそつかまつり候はめ。』と言った後のタイミングで敦盛が『とくとく首を取れ。』と言っている。直実の気持ちが分かったから、この人にならと思ったのではないか。」などと、様々な視点で「殺されるなら直実の手で。」という主張の根拠を挙げていった。授業の振り返りでは、自分とは違った角度から根拠を述べていた生徒の発言に対する賞賛の言葉が出されていた。

ウ 考察

前時までを含め、「敦盛の最期」の内容を確認する時間は設けていなかったが、短時間で根拠を元に主張をしている様子を見ると、各自が現代語訳を確認しながら視写を行ったこと、本時を含め、音読を3度行っていることが内容理解に役立っているのではないかと考えられる。個人で課題について考える段階では読みが十分でなかった生徒も、話し合いによって徐々に自分の意見が変化したり、主張を支える根拠が確かなものになったりと個人内の考えを深めることができた。話し合いの場面では、友だちの発言を踏まえて自分の主張や反論を述べる生徒が多く、課題解決に向けて話し合い、聴き合い、共有し合いながら、多様な視点で読み深めることができ始めていると感じた。相互評価の場面では、友だちの意見により新たな発見があったり、読みが深まったりしたことが生徒の発言からわかった。

4 成果と課題（○成果につながること ●課題につながること）

- 文学作品の授業の中で、生徒が挙げたポイントとなる言葉を基に学習課題を設定することで、生徒の主体性を引き出すことができた。
- 根拠を明確にして話し合うことで、より深い読みにつなげることができた。また、他者の意見を聞き、その意見が確かかどうか自分で確認するために反論することで、自分の考えに広がりを持たせることができた。学力低位の生徒も積極的に発言する場面が多かった。
- 相互評価で他の意見を賞賛することで、協同の喜びを知ることができた。また、賞賛された生徒の自己肯定感を高める一助となったのではないと思う。
- ワークシートを事実(本文)・理由づけ・主張の欄や登場人物別の欄を設けるなど、思考の整理を目に見える形にしたことで、発言する内容も他に分かりやすいものになってきた。
- 音読と視写によって言葉に触れることで、見過ごしていた言葉を見つめたり、言葉の意味を考えたりするきっかけとなり、論理的に読み深める手立ての一つとなったと考えられる。
- 古典を扱う場合、時代背景や状況についての知識の量の差によって、主張や根拠にも差が出る可能性がある。社会科とのカリキュラム・マネジメントの必要性を感じた。
- 話し合いの中で、個人で根拠を見つめ直す時間が十分に設けられない場面があった。個人で考えを吟味する時間を適切に設けることで、読みがさらに深まるのではないと思う。